

平成22年 5月31日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19500211
 研究課題名（和文） 地域メディアの連携による地域間コミュニケーション推進に関する実践的研究
 研究課題名（英文） Research for Promotion of inter-Local Communication through Cooperation with Local Media
 研究代表者
 北村 順生（KITAMURA YORIO）
 新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
 研究者番号：20334641

研究成果の概要（和文）：本研究においては、地域間交流授業「ローカルの不思議」プログラムを通して、大学や高校におけるメディア・リテラシーの涵養や異文化の他者理解の促進、さらには既存のメディア環境に対する批判的理解を進めるための、実践的かつ理論的な方法論と課題とを明らかにした。また、地域メディアが異なる地域間で水平的に連携し、情報流通を進めていくことの可能性とそのための課題についても明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Our studies carried out inter-local educational program, Mysteries of Locals. As a result, we discovered some practical and theoretical methods and problems for cultivation of media literacy, for promotion of understanding other culture, and for critical comprehension of existing media system. In addition, we investigated possibility and problems for cooperation and exchange of media contents horizontally among local media in various areas.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：メディア論

科研費の分科・細目：情報学・情報図書館学・人文社会情報学

キーワード：メディア・リテラシー、異文化交流、人文社会情報学、地域文化、マス・コミュニケーション、地域メディア、交流授業

1. 研究開始当初の背景

(1) マスメディアによる画一的な地域イメージの流布に対する批判的研究
 現代のメディア社会の中で、我々の「他者」に対する理解は、マスメディアにより表象された画一的イメージの影響を強く受けてい

る。例えば、日本国内のテレビ空間で流通しているアジア諸国のイメージの多くは日本からの視点によって描かれたものであり、ここではステレオタイプによる偏向したアジア・イメージの消費が繰り返されてきた。同様の問題は、国内の地方文化の表象におい

でも見出される。現在の日本のメディア環境においてメディア・コミュニケーションは東京一極に集中した構造をもつ。そのため、地方文化についてはもともと表象される割合が極端に少ない。たとえ取り扱われることがあっても、東京からのステレオタイプの視点に強く絡め取られた一面的なものに陥りがちである。一方で、地方から直接自文化について全国に向けて発信する機会や手段は極端に少なく、地域間の水平的なコミュニケーションが極めて難しい情報にある。

(2) 情報通信技術の発展による地域メディアに注目した研究

近年の情報通信技術の発展や、それを前提にした各種の法制度的な対応により、従来のマスメディア型のコミュニケーションとは異なる、草の根的な情報発信の動きが見られる。とりわけ、ケーブルテレビを中心としたパブリック・アクセスの展開や、非営利法人を含めたコミュニティ放送の増加、あるいはインターネットによる Web コミュニケーションやブログの開発などにより、新しいメディアを活用して身近な問題を題材に情報発信を行うコミュニケーションの回路が拡大しつつある。

(3) 地域間交流に関する研究と実践活動の偏り

地域とメディアをめぐる研究において、これまでは地域情報化論として、主に行政区域を主とした地域「内」のコミュニケーションのありかたが論じられることが多かった。とくに、自治体を中心とした行政情報等を地域内に効率的に伝達していくようなメディアの研究に重点がおかれ、地域の「外」に発信してゆくこと、あるいは地域「間」のコミュニケーションのありかたや可能性については十分に議論されてきたとは言いがたい。同様に、各地の地域メディアにおける実際の活動においても、それぞれの地域「内」の事項や問題について取り上げて、地域「内」へと発信していく活動がほとんどであり、地域メディアが相互に連携して地域「間」のコミュニケーションを活性化していくような活動は稀である。

(4) 地域間コミュニケーションに関する交流実践の試み

上記のような状況の中で、研究代表者および研究分担者らのグループにおいては、2001年度より地域間コミュニケーションについての実践型教育研究プログラムとして、交流授業「ローカルの不思議」を実施してきた。これは、各地域の学生たちによる地域間交流のプログラムであるが、まず第一に相手地域に関して抱いている地域イメージを相互に

交換し、そのステレオタイプの歪みを明らかにした上で、自らの暮らす地域についての実情を伝える情報を映像その他の媒体を用いて伝えて、地域間の水平的なコミュニケーションを実践するというものである。

2. 研究の目的

(1) 地域間交流のコミュニケーション・プログラムのデザイン

これまで、研究代表者および研究分担者らの間で、多様な地域の学校間の交流授業「ローカルの不思議」プログラムを実践してきた。本研究においては、これを単に大学における授業プログラムとしてだけではなく、初等中等教育の交流授業の学習プログラムとしてカリキュラム化し、また、地域における情報センターなどで地域外に向けて情報発信をしていく際のプログラムとして開発していくなど、多様な場面において活用できる汎用性の高い地域間交流のコミュニケーション・プログラムとして、プログラムの開発をし、デザインしていく。

具体的には、自らの地域にどのような情報について、どのような視点から取り上げ、どのように他地域へと伝えていくのかという点について、メディア・リテラシー教育の観点からプログラム開発していく。また、交流の実践において、オンラインの情報システムを含めてどのようなリソースを活用していくのが適切であるのか、システム面での利用環境の整備を行っていく。

(2) 地域メディアとの連携による地域間コミュニケーションの推進に関する実践研究

研究代表者および研究分担者の居住する各地域における地域メディア、とりわけケーブルテレビと連携し、ケーブルテレビを活用した地域間コミュニケーションの可能性について探っていく。

これまでのケーブルテレビの活動においては、コミュニティ・チャンネルなどにおいて各地域内の情報を地域内に向けて提供していく情報流通のあり方は盛んに行われてきた。しかし一方で、異なる地域のケーブルテレビ局同士の間で、お互いの地域の情報について交換するような活動は皆無に等しい。既存の地上波テレビの全国ネットワークなどにおいて、各地の情報が全国的に流通することはあるが、その場合は各地域に対するナショナルな次元からの視線、つまり中央である「東京」の視線を媒介したものであり、各地域の独自の視点による情報発信とは異なる内容となってしまう。そこで、各地域のケーブルテレビが連携し、それぞれの地域の独自の視点による地域の情報を水平的に流通させていくことが、地域間コミュニケーションの新しい形として重要となる。

本研究においては、こうしたケーブルテレビを活用した地域間コミュニケーションについて、そこで求められる運営体制や番組コンテンツ、経営面あるいは制度面での課題などについて、実践的に研究していくことを目的としている。

3. 研究の方法

(1) 地域間交流のコミュニケーション・プログラムのデザイン

① 地域間交流の授業実践の開発

まず、地域のイメージマップの作成と交換プロジェクト参加校の各地域の大学生が、実践パートナーである他の地域の地域イメージについてキーワードを抽出し、マップにまとめる。このイメージマップ作成に際して、そのイメージ形成の素となった情報源を、マスメディア、学校教育、直接的な体験などに分類して色分けして表示するように工夫する。こうして作成したイメージマップを交流の相手校と相互に交換することで、自らが住む地域が他者によってどのように偏った形でイメージされており、そのようなイメージ形成にどのような社会的装置が影響を与えているのかが可視化することができる。

つぎに、実践に参加している学生が、自らの居住する地域の文化について、他地域の学生への伝達を目的としてメディア表現の制作を行う。この時の表現様式はさまざまな形態があり得るが、具体例としてはその地域を題材にしたクイズ形式の映像制作（3分程度の問題編映像と解答編映像）が考えられる。この際の映像制作を通じて、実際の地域文化と地域イメージとのギャップを意識化して、ステレオタイプ的な地域イメージを相対化していくような意識が高まっていくことが期待される。

最後に、それぞれの地域で制作したクイズ映像を相互に交換し、問題の解答を考えながら視聴する。その後で、テレビ会議システムなどの情報通信手段を用いて問題制作者と解答者が直接的なコミュニケーションを行う。この交流実践の中では、お互いが抱いていた地域イメージと現実との間のギャップや、地域間の文化的な近似点や相違点などについて議論しあうことにより、異文化交流の実践を行うことになる。また、お互いの制作した映像作品についても、映像の意図や表現で工夫した点、うまく伝わらなかった点などを相互に指摘しあうことで、メディア・リテラシーについての学びの実践も行う。

(2) 地域メディアとの連携による地域間コミュニケーションの推進

上記にあげた授業実践例を、各プロジェクト参加校の所在地域にあるケーブルテレビやコミュニティ FM 放送、地方新聞、などの

地域メディアにおいて素材として取り扱うことの可能性について、各地域メディアと連携しながら検討する。各地域メディアにおいては、メディア特性、報道・制作方針、番組編成や紙面編成のありようなど、当然ながら与えられた環境が異なる。それぞれの条件の中で、大学などの地域の教育機関と地域のメディア機関とが連携していく方法について、具体的な事例の中で検討していく。

4. 研究成果

(1) 地域間交流のコミュニケーション・プログラムの開発

① 「ローカルの不思議」プロジェクトの継続的实施

地域間交流のコミュニケーション・プログラム「ローカルの不思議」プロジェクトについて、大学および高等学校における交流授業の実践を実施していった。助成期間中の 2007 年度から 2009 年度までの 3 年間に於いて、大学がのべ 19 校、高校がのべ 7 校、合計で 26 校がプロジェクトに参加した。

表 1 「ローカルの不思議」参加校

年度	大学	高校
2007	新潟大学、新島学園短期大学、東北学院大学、群馬大学	東北学院高校、法政二高、東北学院榴ヶ岡高校、京都女子高校
2008	新島学園短期大学、新潟大学、愛知淑徳大学、群馬大学、東北学院大学、関西大学	京都女子高校、明星高校
2009	札幌大谷大学、新潟大学、広島経済大学、広島国際大学、東北学院大学、愛知淑徳大学、関西大学	京都女子高校、明星高校

② 授業カリキュラムの標準化

「ローカルの不思議」プロジェクトは、異なる地域の複数の大学・高校における交流授業のプログラムとして設計されている。しかし、プログラムの要素としては、映像制作等におけるメディア・リテラシーの涵養から、異なる地域の他者を認識するための異文化理解に至るまで、さまざまな側面を包含している。そのため、各校の授業実践において、そのプロジェクトに対する目的や達成目標などは、必ずしも完全に一致しているのではなく、多種多様である。しかし、そのような目的や方法の多様性を保持しつつも、交流授業として共通のプロジェクトを実施しえるところに本プロジェクトの特徴はある。

しかしそのためには、逆に、本プロジェクトの標準的な目的や交流方法などを明確化することが重要となり、各実践場面において

は、それらの共通カリキュラムを基盤としながら、各校間の状況に応じて修正、追加、削除を行っていくことが望ましい。そのため、本プロジェクトの標準授業カリキュラムを整備し、ワークシートや授業評価軸のサンプルを整備した。これらのことにより、新規参加校のプロジェクトに対する理解が容易になると同時に、各校の状況に応じた多様なプロジェクト実践の位置づけがより意識化されるようになった。

③交流プログラムの開発と多様化

上記のような「ローカルの不思議」プロジェクトの授業カリキュラムの標準化を進める一方で、プログラムの多様性の開発も試みた。

具体的には、従来型のクイズ映像を用いた交流だけではなく、デジタルカメラを用いた静止画の映像と、メーリングリストを活用した地域間交流を実施した。これらの方法は、とくに高校の教科「情報」などの多人数授業や、映像編集などの設備・機材が十分でない環境においても、本プロジェクトの目的を達成するための方法として試行されたものである。メーリングリストの設定に関する技術面および運用面での労力が必要となったり、メーリングリストにおいて活発な交流を行うためのコミュニケーション・デザインの必要性などの課題はあるものの、状況に応じた現実的な方法として有効であることが実証された。

また、プロジェクト後半の直接交流に際して、フェイス・トゥ・フェイスの対面型直接交流のほかに、スカイプなどのインターネットを活用したアプリケーションを導入して、その有効性について評価を行った。インターネット利用については、学校のネットワーク・システムの仕様などの面で温度差があるものの、相互に顔を見ながら会話のできるテレビ会議方式は、単純なテキストのみあるいは音声のみの交流方法と比較して、学生相互の交流における達成感は大きいことが分かった。しかし、グループ間の交流などにおいては、一度に交流に参加できる人数には限りがあり、あまり多人数が一度に参加すると混乱を招いてしまうことも明らかとなった。

さらに、本プロジェクトの柱の一つである異文化交流について、プロジェクト参加の相手地域に対する理解が深まるだけでなく、自らの地域に対する理解や認識が促進されることも明らかとなった。

(2) 地域メディアとの連携による地域間コミュニケーションの推進

上記「ローカルの不思議」プロジェクトの内容やその成果物となる映像作品等を、各大学や高校の地域で活動を行っている地域

メディアと連携し、地域間コミュニケーションを推進のための方策を検討した。

具体的には、仙台市におけるケーブルテレビ局、および広島市におけるコミュニティFM放送局の協力のもと、プロジェクトについて紹介する番組を制作し、学生の制作した映像作品の放送も行った。これらの番組は、従来は主に地元地域の内容について放送を行っている地域メディアが、他の地域の情報を、けっして中央＝東京の視点に回収されることなく、水平的に情報交換をする機会として位置づけられる。

このような情報流通のあり方は、東京一極集中が進め現在の日本のメディアシステムの中では、今後への発展が期待される有益なものと考えられる。実施に、各局の担当者の評価は好意的なものであり、今後の継続も期待されるものであった。また、本プロジェクトとは別に、ケーブルテレビ局間で番組コンテンツの相互交流が進むなど、このような情報に対する社会的な需要の存在は推測される。

しかしながら、地域メディアとの連携活動を進める中で、課題も明白となった。まず、各メディアは当然ながら継続的な情報発信活動を行っている機関であり、その中で単発的、断続的な情報をどのように扱っていくのかという問題がある。地域メディアと大学・高校などの教育機関が連携していく際には、活動の継続性や連続性をいかに確保していくかが大きな課題となる。

また、番組枠や時間、番組編制など、各局の事情により、必ずしも本プロジェクトの成果を番組コンテンツとして提供していくことが適当でない場合も多い。こうした状況にも対応できるように、地域メディアで取り扱うための時間的余裕や柔軟性を保持していくことも、本プロジェクトの今後の課題として考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 手塚千尋、茂木一司、井上昌樹、屏風を題材としたワークショップの研究：イタリアと日本の小学校4年生の場合、日本美術教育研究論集、査読有、42巻、2009年、pp.25-32
- ② Kazuji MOGI, Miho SHIMOHARA、The Narikiri Emaki (Picture Scroll) Project、International Journal of Education through Art、査読有、Vol.4 No.4、2008年、pp.7-27
- ③ 茂木一司、ゆるやかな学びの創造：人茶ワークショップカフェの実践、群馬大学

教育実践研究、査読有、25号、2008年、
pp.123-134

〔学会発表〕(計2件)

- ① 北村順生、小川明子、稲垣忠、坂田邦子、崔銀姫、「オルタナティブ・メディア・プラクティス：映像交流授業の試みから」、「MELL EXPO 2010」シンポジウム、平成22年3月6日、東京大学大学院情報学環・福武ホール
- ② 小川明子、坂田邦子、北村順生他、メディアにおける〈ローカル〉の表象、カルチュラル・タイフーン in 名古屋、平成19年7月1日、ウィルあいち

〔図書〕(計2件)

- ① 北村順生、科学研究費補助金研究成果報告書「地域メディアの連携による地域間コミュニケーション推進に関する実践的研究」、2010年、74ページ
- ② 栗原隆、北村順生(他15名)、東北大学出版会、形と空間のなかの私、2008年、pp.153-168

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.local-mysteries.net/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北村 順生 (KITAMURA YORIO)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：20334641

(2) 研究分担者

茂木 一司 (MOGI KAZUJI)
群馬大学・教育学部・教授
研究者番号：30145445
小川 明子 (OGAWA AKIKO)
愛知淑徳大学・現代社会学部・准教授
研究者番号：00351156
坂田 邦子 (SAKATA KUNIKO)
東北大学・情報科学研究科・講師
研究者番号：90376608
崔 銀姫 (Choi Eunheui)
佛教大学・社会学部・准教授
研究者番号：30364277
稲垣 忠 (INAGAKI TADASHI)
東北学院大学・教養学部・准教授
研究者番号：70364396

(3) 連携研究者

()

研究者番号：